注）本作品データは「縦書き」「ルビあり」等での表示を前提に制作されています。ご覧になる端末、機種の設定を確認、調整の上でお読みください。

一

右にコカトリスという魔物がいる。

雄鶏の身体は巨岩のような大きさ。頭には焔のとさか、背には禍々しく広がった翼、そして大蛇の尻尾のおまけつき。危険極まりない。

左にはベヒモス。

カバそっくりの巨体。吊り上がった目は濁り、牙の覗く口からは紫色の唾液が垂れ落ち、そのたびに地面をジュッと焦がしている。やはり危険極まりない。

そして真ん中にアメミット。

獅子の胴体に、鰐の頭。身体に浮き出たいくつもの瘤が脈打ち、緑の毒液を常に噴き出して

いる。こちらももれなく危険極まりない。

三体とも人間の数倍の大きさで、邪悪で獰猛な姿は、普段は小動物しかいない森の中で異彩を放っている。

そんな凶悪な存在に対するは、鎧で身を固め、剣を構えた騎士ふたりだけ。あまりに頼りない。その背後の男の子と女の子――エリュッツ村の村長の子、ジンダとステラの兄妹がぶるぶる震えながら泣きべそをかいているのも無理はない。

こんな恐怖体験……トラウマにならなきゃいいけど。

上空から見つけた兄妹の様子を心配しつつ、ハルは数十メートルの高さから音もなく彼らの背後に降り立った。

「探したぞ、ふたりとも」

柔らかな声とともに、ジンダとステラの肩に手を置く。兄妹はビクッとしたあとで振り返

り、そして安堵の笑顔を弾けさせた。

「せ、せんせい〜〜、ハル先生〜〜〜〜！」

ハルに抱きつき、わんわんと泣きだす。

今まで懸命に声を押し殺していたのだろう。魔物と出くわしたら、刺激しないよう物音を立ててはならない、というハルの教えを守っていたのだ。

その健気さに、ハルは胸が熱くなった。先生冥利に尽きると感激した。

成長してるんだなあ、ふたりとも。

感無量のハルに、前方で魔物と対峙している騎士の片方が声を上げた。

「君は誰だ！？　いつの間に！？　いや、とにかく、子供たちを連れてここから早く逃げろ！」

突如現れた、痩身の黒髪青年にふたりの騎士は驚きを隠せない。が、己の使命感に従いハル

たちを守ろうとする。その肩口の三連星の紋章は、王都近衛兵の証。国民の守護は彼らの大切な役回りだ。

「ん〜、でもふたりだけではさすがに敵が強すぎでは？」

ジンダとステラの頭を撫でながら、ハルは魔物三体に目を向ける。周囲にまき散らしている殺気だけで、ひとを殺せそう。

「微力ながら俺もお手伝いを」

「な、なにを言うか、誇り高き王都近衛兵、こんな魔物など――はうっ」

ベヒモスの鼻から鼻息が噴きだし、その勢いに近衛兵が吹き飛んだ。ゴロゴロと、ハルの足元まで転がってくる。

「……」

ふたりの騎士、心が折れる。腰が抜けている。よく見ればふたりともまだ二十代前半、ハルとさほど変わらない年頃だ。

そんな経験の浅いふたりに、大型魔物三体の相手などできるわけがない。コカトリス一体だって、二個師団でようやく討伐できるかどうか。子供たちを放って、逃げ出さなかっただけでじゅうぶんだろう。

「俺の教え子を守ってくれようとしたんだし、そのお礼はさせてよ」

ジンダとステラに「ここで待ってるんだぞ」と言い置くと、ハルは上着の袖をまくりながら、魔物たちに向かって歩き出した。

「お、おい、君！　なにする気だ！？　戻ってくるんだ！」

「君のかなう相手ではない！」

騎士の制止の声にもハルは足を止めない。

「授業の時間だ」

「へ？」

困惑する騎士に、

「先生なら大丈夫だよ」と誇らしげに声をかけたのはジンダで、その隣でステラもうんうんとうなずいている。

「ハル先生はと〜っても強いの」

「先生？」

訝しげな騎士に、ジンダが大きく頷く。

「僕たちの……エリュッツ村の先生さ。勉強も魔法もい〜ぱい教えてくれるんだ」

「魔法？　なら彼は魔法使いか……。いや、それでも魔法使いがひとりやふたりいたところで

――」

ドンッ。

なにが起きたのか、コカトリスが地面に倒れ、その巨体の上にハルが立っている。魔物はぐったりと横たわったままピクリとも動かない。

「……え？　い、いったいなにが……？」

目を疑う騎士たちをよそに、ハルはコカトリスを足蹴にしつつ、左にいるベヒモスに目を向けた。ベヒモスは激しく吠えると紫色の唾をハル目掛けて吐き散らす。が、その防御力の高さゆえ、強酸の唾は一滴もハルの身体に触れることなくすべて弾かれていった。

「――ジンダ、ステラ、よく見ておくんだぞ、魔物との戦い方を」

淡々と告げ、ベヒモスに向かって跳躍。

「ベヒモスは鼻先に神経が集中しているため、そこに衝撃を与えよう」

右拳をベヒモスの鼻先に打ち付けると、でっぷり太った身体が小石のごとく吹き飛び、数十メートル先の大木をなぎ倒して落下した。口から紫色のあぶくをあふれさせ動かなくなる。

「最後はアメミット」

鰐の顎で襲い掛かってくるアメミット。それを頭上に飛び上がってかわすハル。

「アメミットの身体から噴き出る毒液は、その瘤の構造上、左後方には飛んでこない。伝説の勇者ディルラードの戦術書にそう書いてあるね」

アメミットの左後方に降り立ったハルは、その臀部を蹴り上げた。

骨が砕ける音。アメミットの胴体はひしゃげ、その衝撃に上体が突っ立ったところを、首元目掛けて飛び蹴りを喰らわせる。

アメミットは地面を回転し、数十メートルほど行ったあたりでくずおれ、沈黙した。

三体の大型魔物を駆逐するまで三十秒ほど。

先程まであった魔物の威圧感は嘘のように消え、森の清涼感さえ戻りつつある。小鳥がピーチクパーチク鳴きだした。

「な、なんてことだ……」と、目を白黒させている騎士たち。自分たちの見た光景がにわかには信じがたいのだ。

騎士団総出でなんとか倒せそうな大型魔物たちを、村の先生だという若い魔法使いがあっという間に倒してしまったのだから。

「き、君はいったい……？」

ハルは苦笑で答えた。

「田舎の、フツーの、先生、かな」

「ハル先生、子供たちを助けていただき、本当にありがとうございます」

エリュッツ村の村長宅の前、村長カタゴから頭を下げられ、ハルは恐縮した。

「いや、今回は、森の危険性を注意しきれてなかった俺にも責任があります。子供たちを危険な目に遭わせてすみません」

頭を下げ合うカタゴとハルの傍らで、ジンダとステラは腑に落ちない顔。

「でもさ、あの森に魔物がいるなんて聞いたことないよ」

「そうよ、いつもウサギさんとかリスさんしかいないのに」

白髪頭のカタゴも首をかしげる。

「たしかにあの森は村の者も山菜採りに出かける安全な場所。魔物が出たことなどなかったのだが」

三人の疑問に、ハルは先程別れた王都近衛兵たちの話を告げた。

「ブラッダ山で勇者たちによる大規模な魔物狩りがあったみたいで」

ブラッダ山はエリュッツ村の東方にある魔物たちの棲み家だ。

「その討伐の際に取りこぼした魔物が、あの森に隠れたのではないかと騎士たちが話してました」

勇者と聞いて、ジンダとステラは目を輝かせている。

「勇者！？　来てたの！？　すげえ！」

「ねえねえ、勇者ってわたしと同じ女の子なのよ！」

「聖剣を抜いたんだよね！　見てみたいな聖剣！」

「強くて、優しくて、綺麗なんだって！」

その勇者の名はリリアという。

半年前、とある神殿の台座に刺さっていた聖剣を抜き、勇者を襲名した少女。以降、勇者リリアは各地で魔物討伐や、魔王や邪神の動向を探っている。ブラッダ山での討伐もその一環なのだろう。

「でもなあ」と、ハルは少々不服だ。

「魔物討伐はありがたいけど、そのせいで周囲を危険にさらすのはいただけない。まあ、そのために近衛兵を巡回させていたみたいだけど」

それでも結局危険な状況を生み出してしまったのだから、詰めが甘いと言わざるを得ない。新米勇者だから致し方ないのかもしれないが。

「俺の大切な教え子が被害に遭うところだったんだ。勇者にいつか会ったら、文句のひとつでも言ってやろう」

「先生ー！」

「ハル先生好き〜！」

生徒想いの言動に感動したのか、ジンダとステラがハルに抱きついてくる。今度はハルが感激する番だ。

「ふたりとも……」

教え子を正しく指南し、知識、知恵を授け、大人になるための礎を作る手助けをする。そしてそんな子供たちと共に歩み、彼らから慕われる教職。

そうそう、これだよ！　俺がしたかったのはこういうことなんだ！

転生前の自分ができなかったことを、異世界でこうして実現できていることに、ハルは感無量だった。

坂上晴（さかがみはる）。

それが生まれ変わる前のハルの名だ。

坂上晴は日本の、北関東の小さな町に住んでいた教師だった。いや、教師生活をはじめようとしていた青年といったほうが正しい。

大学四年時に教員試験に合格。地元の中学校に採用が決まり、いよいよ赴任一日目、通勤途中に交通事故に遭い、あえなく死去。

しかしその後、生前の記憶を持ったまま異世界に転生した。剣と魔法の異世界の住人ハルと

して人生を歩むことになり、三年前にエリュッツ村の先生になった。村の子供たちに魔法やその他学問、身を守る護身術など、手広く教えている。